

(清水町) 清水ミライ自分ごと化会議 議事メモ

全体コーディネーター	伊藤 伸
説明担当者（自治体）	清水町農林課長 寺岡治彦 十勝清水牛玉ステーキ井活性化協議会事務局長 吉田寛臣 清水町食育推進協議会事務局 奥田啓司
日時	令和元年9月1日（日）14時00分から17時00分まで
場所	清水町役場地下大会議室（清水町南4条2丁目2番地）
その他	グループコーディネーター 香田裕一（十勝の未来を考える自治体職員の会：幕別町職） 藤谷満伸（同上：大樹町職） 渡辺浩二（同上：芽室町職） 参加者数 27名 欠席者数 24名 傍聴者数（町民）2名、（町外）1名、（報道）2名 事務局 前田 真（企画課長）、川口二郎（企画課長補佐）、 田村幸紀（企画課政策企画係長）、中澤優人（企画課政策企画係主事補）

趣旨・概要

第1回目のテーマは「食・農業」。

- (1) 農業を持続していくためには？
- (2) 食への満足度は高いが、それを更に高めるために北海道内や日本全国にPRしていくためには？
- (3) 地産地消の食の魅力を知ってもらうためにはどのようにしたらよいのか？

オブザーバーを交えて3つの分科会でグループ討議を行った。その後の全体会でグループ毎の発表を受け、全体コーディネーターがまとめて意見を共有した。

挨拶・自分ごと化会議の進め方

コーディネーター

ワークショップ（協議）

第1班

ファシリテーター：香田裕一（幕別町役場）

オブザーバー：寺岡治彦（清水町農林課長）

委員：7名

メ①：清水町の農業について、資料をもらって役場の方の話を伺って、自分の中で清水町の農業は不調だと思っていた。人口減少が進んでいることで後継者が不足しているから、売り上げも減少傾向にあると思っていた。しかし、実際は、管内の農協の中で一番の好成績だったり、生乳の生産量も一番を更新していたりと聞いて驚いた。人口が減少しているのにも関わらず、成績が伸びつづけることは素晴らしいことだと思うので、何か全道や全国へ向けて先進事例のような感じで紹介できたら清水町としても、また、十勝としても名前が広まるような宣伝になると思う。

メ②：酪農の分野でも機械化によって作業効率が上がっていると思うし、これからも必要になってくると思うが、清水町で搾乳ロボットを実際に導入している戸数はどのくらいなのか。

オ：実際に搾乳ロボットは価格がかなり高額であることから、全道では約3%の導入率となっている。十勝規模だと約7%で清水町としては全道平均並みの約3%となっている。

メ②：思っていた以上に導入されていないのは価格だけの問題か。

オ：機械の導入に当たって、国としては建物の確認申請をするような制度を採っているので、農家は牧場等を自分で建ててしまうので、確認申請をとっていないことも多々ある。こういった手続きがあることで農家の負担が多いことが課題となっているので、今後緩和が必要となる。

メ③：父が酪農の手伝いをやっているところを見ているが、朝の4時頃に仕事に行って、帰ってくるのにかなり時間が掛かっていた。遅いときには10時近いときもあり大変そうだ。実際にはヘルパーさんがいるが、シフト制で時間帯を決めているため、どうしてもヘルパーさんがいない時間があり、その時間は父と農家さん2人でやっているそうだ。こういった大変そうな話を聞いていると農業への興味や、印象について良い方向には考えづらいと思った。

メ④：娘が酪農家の手伝いをしに行っているが、手伝いの役割なので今後そこで雇ってくれるといった話はなかなか無いという。働きたくても働けない人もいることになる。このような人達がいながらも機械化が進んでいるのでさらに働けないことになっていると思う。またロボットの導入については一定の危険性があることも事実。おそらく大半の農家さんは家族経営でやっていると思うが、農業について勝手がわかっている身内でやっているところが多いことも新規就農が少ない原因ではないかと感じている。新規就農を増やすにあたって、単身ではなく世帯で来るようなことがあれば、福利厚生などの問題点が判明し、改善に繋がり良い方向に進むと思う。

チーズやバターが不足していると報道されているのを見るが、牛乳を捨てる人が絶えないのも事実。もっと牛乳の重要性を実感してもらうためにも、「体験型」の農業が有効だと思う。食育の話と重なる部分もありますが、2～3泊の体験でもっと消費は増えると思う。

清水町ではヤギのチーズも作っているが、知っている人は多くないと思う。千年の森で販売しているものも価格がものすごく高い。千年の森でいえば、チーズだけじゃなく、セグウェイもあるがそれもかなり高額となっている。あれでは集客できない。

清水町には色々な家畜がいてその中には子どもと触れ合えるような動物もいるが、触れ合える圏域にはない。自分の夢は一定程度の土地で子どもだけでなく大人も触れ合える小動物を集めた牧場をつくることだ。土地も買ったが、自分の生活で手一杯なのが現実。牧場とまでとはいかなくても、子どもが動物と触れ合えることが大事かと思っている。

メ①：体験は子どもにとって重要なことで、触れ合いはなおさら良いこと。学童で働いているので今の小学生たちとよく関わっているが、子ども達はすぐに物事を吸収する。おそらく授業等で聞いたであろう内容を学童で私に教えてくれる。子ども達がもっと農業を体験することが出来れば、農業に対する興味や関心が出てくると思うし、それは清水町への愛着に繋がると思う。もちろん、体験に関する事を農家さんに全て任せることは、農業を生業としている中で体験をさせることは難しいと思うので、協力してやっていきたい。

メ④：畑作を体験させることを目的としたボランティア団体を組織するといいいのではないか。畑の整備については農家を経験したことがあったり、家庭菜園をやったことがある人や離農して普段の生活に時間がある人をお願いできると思う。自分も初めて豚に触ったときは恐怖心があった。初めて肌で触れるときは年代問わず共通して感じることだと思う。しかし、この触れる経験が大事。子ども達には初めて畑の土というものに触れ、作物にも触れてもらい結果として、農業に興味を持ってもらえるとこれほど良いことは無いと思う。コ：幕別町でも子ども達を対象とした農業体験事業をかれこれ20年ほど実施しているが、なかなか参加者が増えず固定化している状況。参加したことのある人はその体験が面白くて何回も来てくれる。一向に参加者が増えないのは宣伝方法が悪いのか、またはその他に何か問題があるのかわかっていないのが現状。

オ：清水町でも町内ではないが、学生を対象とした農業体験を実施している。

メ⑤：農協の青年部が町内に小学校3年生を対象に畑作と酪農を年代割りで体験授業していると思う。また農業をやっている立場としては、外へ情報発信したり体験をさせるために動くことで一番懸念していることは「防疫」の問題。もし何も考えずに体験等を実施することになると、自分の家庭が大変なことになってしまうので、農家さんの中でも防疫の部分は慎重になっている。でも、決して体験といったことをないがしろにしている訳ではなく、実際は理解を深めることでクリアできる問題だと思う。ただ、今はお互いに神経質になっているのだと思う。

コ：農家の防疫はどの地域もかなりシビアにやっている。仕事の関係で農家によく行くが、長靴を履いた上からビニールかカバーをかぶせて畑に入る。さらには、その後別の畑に入る時はそのビニールカバーを取り替える。それくらい農家さんは防疫に注意を払っている。

メ⑥：私も養豚をやっているが、外部の方にはもちろん厳しいが、身内にももちろん厳しい。

メ⑤：防疫のことを怠って大騒ぎになることも死活問題に変わらないが、後継者がいないことも死活問題。この問題についてもクリアしたいと考えているが、自分の生活で手一杯なので、体験学習を提供する負担というものは仕事とはまた別物で完全なボランティア。その中で仕事もこなすということは正直大変だ。また、作物等の価格も、自分たちが儲けたいからとっていただけに高くしているわけではないと思う。作っている側からすると、その価格ほどの価値はあるものを提供していると思っている。また、実状としては自分たちの生活も苦しくなっていることも、体験などに手が回っていない原因だと思う。

メ④：防疫については石灰を玄関等に撒くなどニュース等で何度か報道されているため知ってはいる。しかし、防疫がどういったものなのかを実際に見たり、何のためにやっているかを聞いたり体験することが大事。

メ⑦：新規就農がないことが問題なのは良く聞く話だから知っているが、どうしていないのか。何か法律で決まっているとかいうような難しい話なのか。

コ：農家になること事態に法律等で決められていることはないが、補助金をうける際は年齢制限がある。また、他の問題としては現状では農家をやりたくても土地が無いということ。離農者が出て土地が空いても近隣の農家がすぐを買ってしまう。それでもこれから10年、20年経てば現在の規模で農業を営むには限界が来ることは予想できる。

事：農家の方はどういった理由から土地をそんなに購入するのか。作物を作って売らなければならないのか。

メ⑤：人が足りていないことが原因で設備を購入するが、金額が大きいのでその分収入を上げるために土地を買って増やそうとしている。

メ③：昔は、へき地の学校も沢山あり、農家と関わるが多かったと感じている。同級生の家が農家で農作物を身近に見たり触ったり出来た。

メ⑧：小学校の6年間のうちの1年くらいは体験できた方がいいね。

メ④：農業にドローンの導入を検討しているというニュースを見たが、機械化を進めて作業が楽になるのはいいことだと思うが、結局は現在農業をしている世代しか恩恵を受けていないので、今が好調だったとしても、ここからの展望がないように思う。後継者を残すという発想が無いのかと思ってしまう。子どもの頃に関わることが食育にも繋がると思うから農業体験は実施したほうが良い。町ではスクールバスもあるから使わない手はない。

メ⑧：子育て世代の若い方が来てくれるといいね。

コ：作業が簡略化して作業時間が減り、負担が減れば後継したい人も増えるかもしれない。だからといって、全部機械化すればいいかというところでもないのが難しいところ。

メ①：今となっては、農業だけにとどまらず世代間の交流も減少しているので、多少強引にでも「世代」や「職業」を町民とつなげることが必要だと思う。

メ⑧：誰かがやる。これでは変わりませんよね。

メ9：小学生が農業に関わっていないという話があったが、自分が小学生だったときは年に1回～3回は丸1日を使った授業があって、畑に入ってとうもろこしの収穫や、牛の乳

絞り体験が授業であった。自分の弟が今は小学生で、弟からの話や時間割を見ていると明らかにそういった体験が減っていると感じている。中学生になってそういった体験が少なくなるのはわかるが、自分が小学生の頃、10年位前になるが、夏の間は月に1回は学校から配られる紙とかばんを持ち農業体験をして、どう思ったかなどを書いていたと思う。そういった自分が体験することができる機会が減っていることは残念だなと思う。

コ：幕別町でも修学旅行生の受け入れをやっているが、これも十勝管内の生徒を対象にしていなくて、今回初めて十勝管内の学校に募集をかけてみたが、10人募集をして2人しか来なかった。どうも十勝の子ども達からすると身近すぎて興味が薄いのかかもしれない。

メ④：自分が子どものときは子ども会の行事として、近所で農業を少しやっている人のところについて体験させてもらったりしていた。今はあまり子ども会自体が少ないかもしれないが。

メ⑤：子ども会自体はありラジオ体操とかしているみたいだが、農家だと距離的に遠くて、正直うらやましい。

コ：農業の大規模化が進むことで農村部のコミュニティも形成しづらくなってきているよね。

メ④：例えば、廃校になった建物はどうしているのか。

コ：幕別町では廃校となった建物は宿泊施設や、白樺大学校とって老人たち学べる場にもなっている。

メ⑥：清水町の廃校になったところは、2箇所ほど法人化して介護施設をやっている。

第2班

ファシリテーター：藤谷満伸（大樹町役場）

オブザーバー：吉田寛臣（牛玉ステーキ井地域活性化協議会事務局長）

委員：7人

コ：この班は町外から転入してきた方が多い。町への言いづらいことを言ってもらって構わないので、思っていることを教えて欲しい。

清水町は牛玉ステーキ井、牛とろ井、十勝若牛と食へのイメージが強い。皆さんが持つ清水町の食に対するイメージを聞かせてほしい。

メ①：清水町に食育の計画があることは知らなかった。食に関しては、良いものはたくさんあるのはわかるが、町に住んでいて新しい情報をキャッチすることができていない。

牛玉ステーキ井が会員制で運営されていることも知らなかった。知っていれば会員になりたかった。ご当地グルメグランプリの投票も家族や親戚などの票を使って作為的だったと聞いているが、それも手法であり、三連覇したのもすごいことだと思う。

数年前から東京で開催の農業のフェスティバルに参加しているが、3年前に食べた十勝産のじゃがいもがサツマイモ以上に甘かった。通年で鮮度を落とさない技術を持っている企

業の商品だ。この技術は年間3万食を提供する牛玉ステーキ丼などにも活用できる。本町にはそのような新しい技術を農家に伝えるチャンスがなかった。

清水町の農産物を6次化することを進めたい。小さな農業経営でも新たな収入を得られる。収入の安定と拡大で後継者への希望を与えられる。農業の魅力や生きがいを感じるのは収入だ。都会ではそのようなセミナーがたくさん開催されている。町の予算や地域おこし協力隊の予算をそちらに回したらよいのではないか。

清水町には町外から転入してきたが多いのであれば、協力隊にではなく、このような会議に予算をつけるべきだと思う。

6次化計画を皆さんでやろう！という希望を持つ人でグループを作り、勉強会を開催し、行政はそこに補助金をつけて短期間で実行することができないかと思っている。

メ②：清水町の食べ物を考えたときに、加工品であれば「黒にんにく」「鳥せい」「牛玉丼」「十勝若牛」があるが、ごちそう感が強く、日常で食べようというときにどのように食べれば良いか。コスト的にも清水の食とどのように向き合えば良いのかがわからなくなってくる。豚丼はスーパーで肉を買ってきて自宅で手軽につくれるが、前述の食べ物は作るという感じではない。せっかくなので地元のものをおいしく食べたいので、レシピ帳などもあったらよい。

コ：最終的に話を進めていくなかで、今後どのように進めていったらよいかをみんなで考えていくので、その辺を含めてみんなの意見を聞いてほしい。

メ③：農家をやったことがない友人の娘が農家に嫁いだ。農作業もトラクターにも乗ったことがないので周りは非常に心配したが結果は、農家の嫁いで幸せだった。夫やその家族から色々と教えてもらいながらやってきて悪いことはなく有意義な生活を送っているという。これらが今の清水町の農家の後継者問題を考えると、苦労はあると思うが生活のことなども含めて営農指導をして、豊かで幸せに生活している人がいることをアピールしていけば、後継者問題は解決すると思う。特に昨日の人口減少を考えるまちづくりセミナーで講師の先生が言っていたが、十勝は農業だけで生活が成り立っているところだと聞いた。都会では兼業農家が多いが、十勝は農業だけで成り立つ場所なんだ。特色ある地域で、役場などが方向先をしっかりと見据えていけば嫁問題や、後継者対策につながり、それが解決していくと結果的に良い食・良い作物に繋がる。十勝若牛を使った牛玉ステーキ丼やにんにくなどの食のイメージアップに繋がっていく。

コ：食のイメージアップを図りながら後継者問題にも取り組むということか。

メ③：部分的ではなくトータルで考え、良い方向に向かっていかなければならないと思う。

メ④現在牛玉ステーキ丼がアピールできているが、この他に清水町の野菜もどんどんPRできたらよいと思う。また、個人的に清水町は水が一番おいしいと思うし、事実として町には牛乳が豊富にあるので、牛乳豆腐やチーズなど新たなを強みにしていけないかと思う。

清水町では何の野菜が売りなのかとを感じる。実際に「清水産」と耳にすることがないので、野菜も食の強みにできないかと思う。

コ：今あるものではなく、新たなものを掘り起こし、そういうのもPRしたり活用できればよいということか。

メ④：にんにくとかは有名になってきているが、清水町のなかで野菜は何が売りなのか。長いものをつくっても川西産で売り出したり。清水町の野菜を強みに持っていけたらよいと思う。

メ⑤：牛玉ステーキ丼は年間3万食を提供しているが、自分は1回ぐらいしか食べたことがない。それは値段が高いから。あすなる乳製品も値段が高い。贈答品に使うぐらい。豚丼のように家庭で食べておいしいと感じることから回りまわって町外にも広がると思う。肉丼まつりも11品の丼が出店するが、イベント後に継続的に商品化されるのか。それがないのなら意味がない。野菜も地元で採れたものが地元の口に入ってこない。わが町で採れた農産品はおいしいんだよというイメージを作っていけば、町民の口から宣伝することに繋がると思う。

コ：地元の食材を地域の人が食べるのが理想。イベントは外へのPRとか観光がメインになるので、食と考えると地域で消費ということになるのかな。

メ⑥：家庭内での食を考えると食べたいものを作っている感じになる。道外にいたときは子どもたちが地元の食材を手軽にスナック感覚で、そして自宅で食べられるものがあった。秋田の味噌たんぽなど。牛玉、十勝若牛などは食卓に並べる手軽さがない。牛玉メンチも冷凍食品の状態で販売しているので、そのまま食べられる揚げた状態で販売してもらえると手軽感が増すと思う。また、給食で地元産をたくさん出してもらって、子どもたちが家で食べたいと言えるようになると、愛着が増すとも思う。

丼は敷居が高い。スナック感や、夕飯に買って帰ろうと思えるような手軽な商品を町民向けに考えると良い。

メ⑦：御影地区は食に関しては色々ある。コスモファームのコンビーフ、ランランファームの山羊チーズなど、おいしいものはいくつもあるが、常に食べるわけではない。そういう意味で手軽さがない。関わっていないと縁遠いもの。どのくらいの値段であれば町民として地産地消に協力できるか。家計も大事だが商品の適正価格も保たなければならない。学校で教育する食育は「早寝・早起き・朝ごはん」の道徳的なことが中心。地元のを愛して大事にするという考え方をもっと浸透させると、もっと地元産を買おう、使おう、食べようと思うようになるのかなとみんなの意見を聞いていて思った。

コ：先ほど話がでた秋田の食文化。今やっていること、今作っているものが地域に根付くまでにはかなりの時間がかかることだと思う。それをみんなで創っていくことが大事なのかなと思う。また、若干高価であっても買い支えができる範囲もあると思う。

まとめに入りたいが、清水の食を今後どのようにしたらよいか。皆様のご意見で強みや課題は出てきたと思うが、これからこうしていったらよいという考えを聞かせて欲しい。

メ①：清水町は馬鈴薯の耕作面積が広いので、「焼きじゃが〜サツマイモじゃないのに甘い〜」という名称で商品開発をしたい。また、本町で優位性の高いものは牛。生乳と牛肉を併せて販売する方法を考えたらどうか。優位性に平行して販売戦略に乗せるのはどうか。商品名は「ペケレミルク」。また、フロイデ跡地を買い戻して、食育の観点から清水町の野菜を使った新たな商品、新たな食材を開発・研究する場にしてはどうか。

メ②：気候的に野菜は難しいのか。

メ①：牧草やデントコーンの飼料を多く栽培しているから面積的な問題だと思う。

コ：作って作れないことはないと思う。

メ②：収穫量があれば野菜の加工品を開発できるのかもしれないと思ったが無理かな。

メ①：昔は漬物工場を作るという発想があったが原料の供給が不安定で実現しなかった。

メ⑦：なんでもかんでもやりたいといっても限度がある。野菜が少ないと聞いて意外だった。アスパラも売り出しているが意外と清水産が出回っていない。収量データを見てもそれほど多くはない。無理に頑張ってもしかたがない。牛に特化するとかでもよいが、価格が問題。いかに地元で流通されるのか。その辺が解決されないと首都圏や他地域に流通され、町としては生産して終わりになってしまい何も変わらない。

メ⑦：野菜の清水産のデータを見る限りがそもそも出回っていない。野菜が少ないのであれば無理に頑張らなくても良い。牛に特化するのであれば価格の問題を含めていかに我々地元の口に入るのか。その辺を解決しないと、生産して終わりにってしまう。

まとめると、手軽感が欠けているという問題かと思う。価格面や、家庭での作りやすさという面で。もうひとつの方向性として、地産地消を進めるべきだということで話し合いはなされたが、どのように流通をしているかという課題がある。細かい部分で言えば、マーケティングに工夫が必要だということ。

メ①：野菜の地産地消で言えば農産物の6次化が重要。やる気になれば自ら製品化して販売できる時代。おいしいものを安く提供するかどうかは、そのときの農業経営者の判断となる。6次化するコストが高ければ価格も上がるし、コストを抑えられたら価格も安くなる。清水町に道の駅なくて当たり前。それは供給する野菜がないから。むしろ北海道に少ない酪農に特化した道の駅を作ったらよい。そしてそこに付随したレストランで日替わりメニューを出したらよい。そして生乳を飲むことができる。そして子ども、観光客の体験型の施設をつくと良いと思う。

3班

ファシリテーター：渡辺浩二（芽室町役場）

オブザーバー：奥田啓二（清水町食育推進協議会事務局）

委員：11名

オブザーバー：奥田啓二（清水町食育推進協議会事務局）

委員：11名

◆連想するキーワード、自分が感じる事を付箋に記入し順に発表してもらった

メ①～食育推進計画というものがあること自体知らず今回初めて見た。

学校での朝食摂取率などのデータはあると思うが町全体のデータはどうか。

地域で作られた食材が地域にどれだけ流通しているのか。

メ②～スーパーで十勝清水町産と表示されたものはほとんどないように感じる。

メ③～子供の頃の食習慣は大人になっても続くのでとても大事。

子供の頃に3食食べていると大人になっても3食食べる習慣が身についている。

新鮮、安心な物が店頭に並ぶと循環も早くなり価格も抑えられる方向になるのでは。

メ④～給食に地元の食材が使われているというが子供の評判はあまり良くない。

地元の食材の何が旬なのかわからない。

安心、安全な食材のために具体的に何が行われているのかわからない。

メ⑤～おいしく食べる要素として、一人ではなく家族や友人など複数で食べるというのは大事なので、色んな人と食事をする機会があればいい。

メ⑥～全ての食材が地元で揃うわけではないので、清水町産にこだわらなくとも、十勝産、道内産、国内産を意識して使うことが大切。

メ⑦～牛玉井、牛トロ井を売り出していくのはいいが、肉が苦手な人もいるので野菜メインの物もあったらいい。

メ⑧十川～地元食材を給食に使っているが、何をどんな形でどれだけの量を使っているのかを子供に伝えることでイメージが残っていないのではないかと。

地元の人が実際に食べて、味を知ってほしいし直に伝えることでPRになる。

メ⑨～生産者側からすると価格で勝てなければ流通していかない。流通先を考えて生産しなくては商売としてなりたない。

メ⑩～食で大事なことは安全、安心。トレーサビリティを消費者にどれだけ理解してもらえかが大切。

限られた予算の中で、食材を国産だけで賄うのも現実的には難しいのではないかと。

家庭における食育の基本は1日3食しっかり食べることで、その習慣を身に付けさせることが重要。

家族揃ってご飯を食べる機会が減ってきているのではないかと。

◆それぞれの意見を聞いたうえで感じる事、知りたいこと、不思議に思うことなどを自由に発言してもらった。

ファ～ここからはフリーでお話してもらえたらと思います。

食育とか地産地消が大切だとはわかっているんですけど、何で必要なのかなというところから考えなくてはならないのかなと感じました。

皆さんからこういう事だから地産地消が必要だよねというのがあったら

メ⑩～町外に転出した娘が清水の野菜はおいしいと言うのでわざわざ送っている。

清水の物を食べたら他のものは食べられないと行っている。

ファ～嬉しいですね。

メ⑩～地産地消は消費量、生産量、流通量のバランスが難しい。1日の消費は限られている。鮮度を保って消費地へ届けるのは難しい。

芽室の愛菜屋はうまくやっているとと思う。産業として大きくやっているものを地元で消費するっていうのはなかなか難しいと思う。

ファ～作っている人の思いを聞いて食べるのと聞かずに食べるのでは違う。

メ⑨～地元の人が地元の物を理解して購入、食べているか。少ないと思う。

農家の人がどうやって作っているかをPRしていかなければならない。

生産者と消費者をうまくつなげていかなければならないと思う。

ファ～消費者と生産者の関係についてはどうでしょうか。

メ⑧～生産者は消費者、消費量を考えて生産しなければならない。

メ⑨～農家は自宅で食べる物は必要な分だけ作って、売る物は大きく作る。

メ①～消費者としては、形が悪くてもおいしくて安いものが手に入れば嬉しい。

ファ～はね品を手に入れることについては他の方も感じているようですが。

メ⑤～私もはね品があればはね品が欲しい。安ければ選んで買います。

何かいい方法があればと思います。

メ⑧～生産者としては、そもそも売り物として流通しないはね品に収穫の手間を割かない。

収益を上げるためには収穫して安く売るよりもそのまま廃棄にする。

メ②～入荷した品物だけを売る三丁目広場の販売方法はいいが、駐車場がないのが不便。

ファ～刃金さんは移住されてきたということですが、向こうの感覚としては。

メ④～品質は別にして農産物によっては東京で買う方が安いものもある。

流通にはお金がかかるという話も聞いたが、道の駅があれば地元の食材を提供できて住民も助かるのでは。中札内の道の駅はうまくいっているように思う。

メ⑦～高校生の時に廃棄野菜で加工実習をした経験がある。高校生とコラボする機会があればいい。

ファ～せっかく高校がある町なのでいいかもしれませんね。

メ⑤～食材の産地にこだわる感覚があればいいと思う。子供の頃においしい記憶が残れば将来地元に戻るきっかけにもなる。

ファ～吉野さんが先ほど話していたように、娘さんが野菜を送って欲しいっていうのも子供の頃の記憶からきているものだと思いますね。

全体会

(各班の発表)

1 班

農業はすばらしいが展望がない

T P Pや貿易のニュースが報道されているが、その現実味を都会の人は持っているか。子どもたちがいかに農業体験をするか。都会からどう取り込むか。今後の方向性を考える必要がある。

町をアピールするために、移住体験できる施設が必要。

2 班

牛玉ステーキ丼などの手軽感がキーとなる。そのために価格や家庭で調理できるかが課題。地産地消を進めているほど、地元産が地元に戻ってこない。

生産→加工→販売といった6次化を進める。

牛肉・乳製品など、何かに特化して販売するマーケティングに力を入れる。

3 班

子どもたちを中心に、食べることの大切さを教える。朝食の大切さを子どもだけでなく親も理解し、

家族揃って規則正しい生活を送る。朝食率100%を目指す。

エリアを、町内<道内<国内などと、広範囲で考えた中での地産地消を考える。

消費者ははね品などを購入できる場所が欲しいが、生産者は労力(手間)がかかるのでやりたくない。

鮮度は強み=清水でしか食べられないことを強みにする。

(全体)

にんにくの商品化、ブランド化は十勝全体で進めていきたい。

視野を狭く、自分ごとに。清水ごとに。

キーワードは、子ども・体験。清水町が食に豊かだと子どもたちに感じてもらえるにはどうしたらよいか。体験・朝ごはんのほかに何?(玉井)子どものときの実体験で感じる事が一番大きい。

行政や学校が関わらなければならないものなのか。

まとめ

○子どもに対してどのように対応していくか

○地元の食として価格と家庭での作り方・作りやすさ

- 生産者としての労力を考える
- ターゲットや考え方を区域で分けて考える

(町長から)

清水町として、十勝全体として、北海道として勝負していくものがある。

都会では「十勝」にネームバリューがある。

十勝全体の中の1つとして光り、十勝全体として輝く戦略を進めたい。

農業及び農業関連産業で500億円、それにプラスして商工業100億円。町全体の8割を占める。

この強みをまだまだ発揮していく。高齢者対策にも繋げる。

これから第2回以降の分野でも「強みを活かしていない」という意見がでると思う。

ぜひ生活者視点のご意見をたくさんいただきたい。